

特集 サウジアラビア留学体験から見えてくるもの

イスラームについての報道が「アラブの春」が起きて以来多くなっている。しかし、それらは相変わらずイスラームを暴力や戦争と結びつけたものがほとんどであり、イスラーム世界の実態についてのものはあまり聞かれない。今回、サウジアラビアに留学中の二人の日本人学生が一時帰国したのを機会に彼らの目を通したサウジアラビアの現状を伝えてもらうことにした。一人目の野村君は拓殖大学国際学部卒業生で、もう一人の堀口さんは拓殖大学大学院国際協力学研究科修士課程卒業生である。二人は、時期は異なるもののサウジアラビアの大学に留学することになり、それぞれの体験を通してイスラームを肌で感じている。堀口さんは特にサウジアラビアの女子大学という男子禁制の場所でのイスラーム女性の素顔の生活を報告している。二人の若い感性でとらえたイスラーム世界を知ることが、我々にイスラームの異なる一面を提供してくれることになるだろう。

留学雑記

キングサワード大学
教育学部イスラーム学科

野村明史

家族：

私はサウジアラビア政府の国費留学生として、リヤードのキングサワード大学でイスラームについて学び、研究している。日本人にとってイスラームはなじみが薄い。イスラームと聞くと、お酒を飲んではいけない、豚は食べられない、一夫多妻制、おそらくそんな言葉が出てくるのではないだろうか。過激派、戦争、そんなイメージを持たれている人もいるだろう。最近、日本のテレビでもサウジアラビアを紹介する番組を見かけることが多くなってきた。しかし主題は石油、経済的つながりなどが多い印象を受ける。私がサウジに来てイスラームを学ぶようになってからもう六年になる。ぜひイスラームからみたサウジアラビアを紹介したいと思う。



食事風景

私がサウジアラビアと関わるようになったきっかけは、もうかれこれ12年前に日本で勉強していたサウジ人留学生たちとの出会いである。彼らと仲良くしているうちに私は自然とイスラームに興味を持つようになった。彼らは私の想像を超えて家族、特に母親を大切にしていた。必ず毎週一、二回、遠くのサウジまで電話をして家族と話していた。中でも母親と話している時間は一番長かった。電話が終わると必ず決まったように「あーすっきりした」とニコニコしながら言っていた。高校を卒業して福岡から上京したばかりで、一人暮らしを満喫していた当時の私には信じられない光景だった。また時間も約束にもルーズな彼らが、コンビニまで走って、国際電話のカードを購入し、何かにせきたてられるように家族との連絡を頑なに守ろうとする姿は異様にも思えるくらい、熱いものを感じた。また今から六年前、私がイスラームを学ぶためにリ

ヤードに到着した日、無事に到着したことを家族に報告したいと言った時は、そこに居合わせたサウジ人が皆「私の携帯電話を使ってくれ」と言ってくれた。日本という遠い国へ何分話すかも分からないのに、彼らは笑顔で自分の携帯電話を差し出した。日本でこのような光景はまず見られない。遠慮も重なり数分で報告を済ませると、なんでもっと話さないんだと眉をしかめてきた。そして私の感想を聞くまでもなく、みんな「気持ちが落ち着いたらどう」と言葉をかけてくれた。啞然としながらも、私の心には彼らの家族を大切に思う気持ちが強く刻まれた。

リヤードでの留学中、私は大学の寮で生活することになった。そこには多くの国のムスリム留学生が住んでいる。中国、韓国、東南アジア、欧米、アフリカ、南アジア、南米、本当に世界のあらゆるところからの留学生だ。そこは世界のイスラームの縮図そのものだった。留学生には日本円で二万円ほどの補助が毎月支給される。決して多い額ではないが、住居費や光熱費は無料、食事も校内で三食、格安で食べることができ、学生が貧乏生活するのにはなんとか事足りる。寮生活で私が驚いたのは、南アジアやアフリカ人留学生の真摯さである。彼らは全く裕福とは言えないが、生活費を切り詰めて、その少ない奨学金から本国の数十人単位の家族に仕送りをしているのである。彼らにとってはサウジアラビアでの勉強は一種の希望である。また彼らは非常に純粋で、最初勉強がよくわからなかった私をいつも笑顔で手伝ってくれた。彼らの笑顔は完熟の果実のように素敵だった。勉強についても熱心だった。そして彼らも毎週、人によっては毎日、家族と連絡を取っていた。

私はある日、思い切ってサウジ人の友達に「日本では『お母さん、お母さん…』なんていうと、『マザコン』といわれ女性から嫌がられる。奥さんは何も言わないのか?」と尋ねてみた。すると彼は、質問の意味が分からないというように、「彼女も自分のお母さんが大好きだし、私達にとって自分達のお母さんは何よりも大切だ」と言った。分かってはいたが、くだらない質問をしてしまったと後悔した。イスラームでは積極的に両親への孝行を勧められている。

イスラームの聖クルアーンには次のように書かれている。「また両親に孝行しなさい。もし両親がまたそのどちらかが、あなたと一緒にいて老齢に達しても、かれらに『ちえっ』とか荒い言葉を使わず、親切な言葉で話しなさい。そして敬愛の情を込め、両親に対し謙虚に優しくして、『主よ、幼少の頃、わたしを愛育してくれたように、二人の上に御慈悲を御授け下さい。』と（祈りを）言うがいい。」(17章23、24節)

またハディース（預言者ムハンマドの言行録）は次のように伝えられている。

預言者ムハンマドの所に一人の男がやって来た。当時、預言者をはじめ多くのムスリムが迫害を受けていた。その男は、預言者と一緒に戦いたいと名乗り出た。預言者はあなたの両親はご健在ですかと尋ね、その男は、はい二人ともと答えた。すると預言者は、あなたの両親の所に帰りなさい。そして二人に孝行しなさい、と言ったといわれている。

1400年以上続くイスラームの中で親孝行の文化は社会に強く根付いたのであろう。私のあるサウジの友人が日本に仕事で赴任した時に、奥さんと子供を連れてきたが、途中でその奥さんと子供をサウジへ帰らせた。家族を大事にする彼らが何故、と不思議に思ったが、聞けば奥さんのお母さんが高齢で寂しがり、自分の娘が遠くに行くことを嫌がっているのだという。彼女の親を大事にし、敬意を

払わなければならないので私は寂しいが仕方がないと微笑んで言った。こういうことを学び、気づかされた私の留学生活は、本当に私にとって大きな財産である。最近では、週末寮に残っているサウジ人学生を見ると、実家に帰ってやれと小言を言うようになってしまった。

病気：

アラビア語に「アルハムドゥリッラー（アッラーに賞賛あれ）」と言う言葉がある。だいたい良い事があった時に使うことが多い。挨拶でも、「お元気ですか？」と聞かれると「アルハムドゥリッラー（おかげさまで、元気です）」という意味で返事を返すのが挨拶になっている。日常この言葉を聞かないことはまずない。

イスラームでは、この世界はアッラーからの試練の場であり、たとえ悪いことが起きてもそれは試練であり、また病気のような苦しいこと、辛いことは、日々知らず知らずのうちに犯している自分の悪いことの罪滅ぼしになると教えている。

聖クルアーンには次のように書かれている。

「人はすべて死を味わう。われは試練のために、凶事と吉事であなただを試みる。」(21章35節)

また、特に病気に關しては、ハディースに次のように伝えられている。

預言者ムハンマドは言った。「信者は彼の小罪が赦されないことなくして痛みや疲労や病気や悲しみや心配に見舞われることは無い。」

つまり、痛みや疲労や病気や悲しみや心配は小罪の罪滅ぼしになるということだ。

以前、とある高校生に会った。彼は若くして糖尿病をもち、つねにインスリンとそれを打つ注射セットをもちあわせていた。しかし、彼は「確かに、この病気がわかったときは悲しかったが、両親がこれはアッラーからの試練だと優しく諭してくれて、今ではそれに満足している。」と明るく言った。

日本でも信じる者は救われるという言葉聞いたことがあるが、信仰をもち、それによって運命を受け入れた人間はこうも凜としているのかと感動した。またこうも人の心を前向きにさせるイスラームとはすごいと感じた。

聖クルアーンには次のように書かれている。

「一人ひとりに、われはその運命を首に結び付けた。そして復活の日（最後の審判の日）には、（行いの）記録された一巻が突き付けられ、かれは開いて見る」(17章13節)

さて、病気に關して私がとても驚いたことがある。それはかれこれ十数年前、当時日本で出会った最初のサウジ人の友人に連れられて、初めてサウジアラビアへ行ったときのことで。彼とは、大学生になって東京に住みはじめた時、駅前で突然話しかけられ、話しているうちに気が合い、急激に仲良くなった。一緒に勉強したり、困ったときはお互いに助け合い、私の福岡の実家にも遊びに連れて行き、大親友の一人になった。まさに運命的な出会いだった。

そんな彼が「お前にぜひサウジを見せたい。うちの実家にも来て欲しい。」と言ってくれた。当時は知らなかったが、サウジアラビアに入国することはとても難しく、彼が保証人になってくれて、サウジとヨルダンの国境付近にあるグライヤートという町にある彼の家で1ヶ月ホームステイをすることになった。もちろん、アラビア語も全くわからず、イスラームについても全く何も知らなかった。その時、私は19歳。まず驚かされたのは、そこには全くお酒が売られていないことだった。世界にこんな国が存在するということがショックを受けた。そして女性が真っ黒の被り物(アバーヤ)でスッポリ覆われていて、誰が誰だかさっぱりわからないことにも驚かされた。そしてなによりも最初に空港に到着した時、とても印象的だったのが、彼を出迎えに彼の兄と友人が8人ほど来ていたことだった。家族や人のつながりの強さを感じさせられた。

私の友人には兄弟がざっと10人ほどいる。彼はその中で真ん中くらいだった。彼の家に到着すると、違うお兄さんが出迎えてくれた。その人は友人より10歳ほど年上で、見るからに威厳が漂ういかつい風貌をしていた。聞けば、彼の仕事は警察官。どこかの警察署の署長で悪人をびしびし取り締まることで有名らしい。



グライヤートの町の様子

いとこのことで妙に納得させられた。

滞在中は、そのお兄さんがなにかと面倒を見てくれた。しかし、彼はすぐカッとなる性格で、何かあるとよく怒っていた。ところが、彼が怒っても周りの人は何事もないように涼しい顔をしている。日本で居合わせれば、眉をひそめてしまいそうな感じでも、誰も気にとめていなかった。

ある日、彼とサッカーゲームをすることがあった。ゲーム中に彼が、遊びに来ていた部下らしき人へ何か言っているの、何と言っているのかと聞くと、「こいつにゲームを教えてやっているんだ。」と言っていたらしい。私はこの言葉に火をつけられた。言ってくれるのではない、このゲームを作った国の人間として負けるわけにはいかない。周りはすべてサウジ人。アウェーな空気の中、若さに任せてよけいに張り切った。そして私は勝ってしまったのだ。彼はもちろん不機嫌になった。私が、「これはゲームだから怒るなよ」と言うと、私にわかるように英語ではっきり『I HATE LOSE』（負けは嫌いだ！）と熱を込めて言った。そして、「もう一度やるぞ」と言われ、そしてまた勝ってしまった。2連敗した後、彼は部下が居合わせていたこともあってバツが悪くなったのか、手にしていたコントローラを床に叩きつけ、ぶいっと隣の部屋へ行ってしまった。そのコントローラは付近にあったティーカップを粉々にし、なぜかゲームのディスクも割れてしまった。その破壊力に圧倒された。当時、格闘技でボブサップが人気絶好調な時期だったが、その体格からもまさに彼を彷彿とさせる出来事だった。普通なら、年上ということや彼の立場を考えるべきだったが、何よりもあの挑発的な一言と、私の若さゆえに余計な闘争心を燃やしてしまったのだ。そして、その日は私の前に現れなかった。その後始末を、お母さんらしき人（目以外全身黒ずくめだったのでわからない）が、笑いながら箒で掃いていた。

次の日、その彼が私のところへ突然やってきて、「今から外に行くから車に乗れ」と言った。何がはじまるんだと一瞬緊張した。だが、男として引き下がるわけにはいかないと意気込んで車に乗り込んだ。しばらく車を走らせると彼は、人が変わったようにニコニコしながら「昨日は、急に怒って悪かったな。これからゲームを買いなおして、昨日の続きを楽しもう」と言ってきた。内心もうゲームはごめんだと思ったが、彼のその潔さや男らしさに少し感動した。実際彼は一番私の身の回りの世話をしてくれたし、何より情に熱い感じがした。

そして、その後私が名誉の惨敗を喫したことは言うまでもない。そんな彼とはサウジに来て出会った人の中で一番仲良くなっていた。私と別れる時は、目を潤ませながら見送ってくれた。

ある時、私が「彼はどうしてもあんなに怒るのか？」と彼の家族に聞くと、「ああ、彼は高血圧なんだよ。」と笑って答えた。それだけなのかと聞き返したくなるような返事だった。そして、「だって病気だからしかたないよ。」と言って終わった。もちろん、何よりも家族を大事にする彼らが自分の家族のことを決して悪く言ったりしない。それはたとえ冗談でも、こちらでは大きな恥だ。だとしても、何も気に留めていないようだったし、それによってイライラしている様子もなかった。家族以外の人と同じような感じだった。病気の人の怒ったり、嫌ったり、責めたりしたところで、その病気がよくなるわけでも何かが変わるわけでもない。そんな自分の力ではどうすることもできない現実をみんなが素直に受け入れているようだった。なによりも、そんな寛大な彼らの振る舞いに正直、すがすがしさを感じた。これは今でも忘れることが出来ない印象的なことだった。それまで味わったこともないようなイスラームが教えている寛大さに初めて触れた瞬間だった。

イスラームでは病人や弱者に対して常々優しさを示すことを勧めている。預言者ムハンマドのハディースに次のように伝えられている。

「預言者は言った。『あなた方が病人、あるいは死者の側に行った時は、良きことを言いなさい。まことに、天使達があなた方の言ったことを保証するであろう』と申された。」

また、次のようにも言っている。

「ムスリムが病気のムスリムの兄弟を見舞うとき、彼は戻って来るまでは天国の果樹園にいるようなものだ。」

日本で知り合ったその友人とは今でも深い親交がある。当時大学生だった彼も今では、3人の子供の父親である。彼らに幸が多いことを祈りつつ、このイスラームの精神が広く伝わることを願っている。

留学報告

プリンセス・ヌーラ・ビント・**堀口 有**
 アブドゥラフマーン大学在学

私は現在、サウジアラビア王国の首都リヤードにあるプリンセス・ヌーラ・ビント・アブドゥラフマーン大学（以下PNU）に留学する機会を得、同大学文学部に併設されている「非アラビア語話者のためのアラビア語学院」でアラビア語を学んでいる。

PNUは「世界最大の女子大学」と言われ、その敷地は800万平方メートルを超えるという。リヤードにあるキング・ハーリド国際空港からリヤード中心部に向かう際には必ず右手に長く続く壁を目にすることになるが、その壁の内部がすべてPNUの敷地である。大学には10を超える学部があり、正確な数は不明ながら相当数のサウジ子女が学んでいる。

PNUは1970年に設立されたリヤード女子大学を前身とし、この空港近くのキャンパスが完成したのはごく最近のことであるが、リヤード女子大学時代のキャンパスもリヤード市街に存在する。こちらは現在、大学1年生のためのキャンパスとして使用されている。ここで行われる課程は「予備課程」と称され、日本でいえば高校で学習する内容を英語で受講するそうで、ここでの成績上位者から順に希望の学部を選択できるとのことである。

一方、筆者のような留学生の場合はまず前述した「非アラビア語話者のためのアラビア語学院」に入学し、ここを無事卒業できれば予備課程、学部へと進むことができる。この学院には本年5月時点で300人超の留学生が在籍している。4つのレベルに分かれており、入学時に受けるレベル判定試験の成績によってどのレベルから始められるかが決まる。レベルが上がるにつれ履修科目数が増え、レベル1ではごく簡単な科目しかないが、レベル3からはアラブ詩なども加わってくる。アラビア語学院ではあるが、アラビア語の科目だけではなくイスラーム学の基礎科目もあり、レベル1ではクルアーン暗誦、2ではそれに加えてハディース（預言者ムハンマドの言行録）を履修しなければならない。またアラビア語の教科書もイスラームにちなんだ話題が多く、アラビア語科目の試験においてもイスラームに関する知識が必要とされる。大学は日本同様1年2セメスター制で、1セメスターで1レベル終了するシステムのため、レベル1から入学し学院を卒業するまでには2年かかる。

留学生の国籍

学院で学んでいる留学生の出身国は、多岐に及んでいる。筆者が本年訪れた時点では、最も多いのはフィリピンからの学生で30名程度いた。それ以外で目立つのは西アフリカ諸国の学生で、マリ、ギニア、トーゴ、ガーナ、ブルキナファソなどが多い。ニジェール、ガンビア、コートジボワール、シエラレオネなどからの学生もそれほど多くはないが在籍しており、アフリカ大陸という枠ではソマリアからも多数学生が来ている。アジアからはタジキスタン、インド、パキスタンからの学生が多く、アフガニスタン、中国、タイからの学生もいる。その他には欧米諸国（アメリカ、カナダ、フランス、セルビア、モンテネグロ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、コソボ、アルバニア）、ロシア、キルギス、イラン、ミャンマー、マレーシアの学生が少数ながらい。日本人は筆者を含め2名が在学している。

妊婦の留学生

1クラスは、40名程度になるが、こういった国々からの学生と肩を並べてアラビア語を学んでいて驚かされるのは妊婦の多さである。日本では通常、大学で妊婦を見ることはほとんどないが、ここでは妊娠している学生がそこかしこにいる。これはなぜかということ、「夫がイマーム・ムハンマド・ビン・サウード・イスラーム大学（リヤードにあるイスラーム大学）に留学しているため、自分もサウジに来た」という学生が多いからである（PNUの留学生は全員サウジの国費留学生であるため、授業料を払う必要はない。そればかり

か月々2万円程度の奨学金と、年に一度自国へ戻るための往復航空券もサウジから支給される）。さらに驚くのは、これらの妊婦の多くが出産数日前まで授業を受講し、そして出産後数日で授業に復帰することである。そういった出産したばかりの学生に子育ては大変ではないのかと聞くと、子供が夜泣きするので昨日も2時間しか寝られなかった、という返答が返ってくるのがよくあった。授業は土曜から水曜まで毎日8時から14時頃までである。乳児を育てながら勉学に励む彼女たちのバイタリティには感嘆するしかない。

このような夫とともに来た学生は家族と学外で暮らしているケースがほとんどであるが、独身者や夫がリヤード以外にいる場合（夫はマディーナ大学にというケースも少なからずあった）には大学敷地内に用意された学生寮に住むことになる。学生寮は現在のところ6階建ての建物4棟が用意されており、うち3棟はサウジ人学生用、1棟が留学生用となっている。筆者が昨年入寮した際にはサウジ人と留学生の別なく同じ寮に住んでいたが、2月にルールが変更されサウジ人学生と留学生は別の寮となった。

寮生活

寮の部屋は現在のところ一人一部屋となっており、各部屋には水道、洗面所、シャワーが完備されているが、自炊は禁止されており火気の扱いは厳禁である。そのため、食事については毎月月初めにクーポンが支給され、そのクーポンと引き換えに食事をもらうことができる。ただしこの食事は一日一食のみであり、それ以外は自分で購入するほかないが、問題なのは大学内に店がないため、買えるものが非常に限られていることである。まず寮の学食で購入できるのはサンドイッチやケーキ、菓子やジュースといったもののみで、大学内ではそれ以外にプレッツェルやケーキ、ピザが買えるだけである。生活必需品はおろか、学生にとって必ず必要となる教科書やノート、ペン一本すら学内では入手できない（場所は用意されているがすべて準備中のため、いまだ買える状態にはなっていない）。そのため学外に買いに行く他はないが、我々女子留学生にとって外出は容易ではない。

外出許可

寮生が外出するには以下二つの方法しかない。一つはマハラム（男性の保護者。結婚できない間柄の男性親族）もしくはワキール（その代理。女性でも可）に寮まで迎えに来てもらい一緒に外出する方法であり、もう一つは寮が用意するバスに乗り込んで他の寮生たちと一緒に買い物に行く方法である。前者はマハラムもしくはワキールが近くにおり、頼めばすぐに来てくれる場合には良いが、そうでない場合には後者しかない。だが、後者の場合でもマハラムまたはワキールが寮の買い物への参加を許可していることを証明する文書を寮に提出しなければならないため、提出できない場合（中にはマハラムやワキールがいない留学生もいる）には外出できない。

許可が取ればスーパーマーケット（週2回）やモール（週1回）、本屋（週1回）などに他の寮生たちと一緒に行くことができるため、それを利用して必要なものは外で買い揃えるというのが現在の寮生の暮らし方である。

普段のサウジ人女学生

最後に、サウジ人女子学生について簡単に触れたい。日本人がイメージできるサウジ人女性像は、全身黒衣に身を包んだ姿のみであると思うが、その黒衣の下の彼女たちはごく普通の女子大生である。自分たちで作ったアラビックコーヒーを持参し、至る所で即席お茶会を開いて話を花を咲かせている。話の内容はファッション、結婚、映画やドラマ、その他彼女たちが好きなものについてであったりと、日本と変わらない。サウジでの女性の生活はしばしば抑圧の象徴のように語られることがあるが、女性しかいないところでは大いに騒ぎ、笑い、実に生き活きと生活している。そういった光景を見ると、「抑圧」という表現が彼女たちの価値観に依ったものではなく、外部の価値観からの判断でしかないのではないかと思うのである。



寮から見た大学校舎

国を挙げて取り組むマレーシアのハラール対応 —MIHAS2013訪問記—

イスラーム研究所客員教授 シャリーア専門委員会委員長 **武藤 英臣**

2004年、YADIMとして知られるIslamic Dakwah Foundation Malaysia（マレーシアイスラーム宣教基金）からの莫大な支援を得て、マレーシア政府国際貿易産業省（MITI：Ministry of International Trade & Industry）が主催し、マレーシア国際貿易開発公社（MATRADE：Malaysia External Trade Development Corporation）が組織・運営したマレーシア国際ハラール展示会・見本市（Malaysia International Halal Showcase）は、MIHASとして、近隣諸国のみならず世界ハラール製品見本市として知られるようになっていく。その第10回展示会（MIHAS 2013）がクアラルンプール市中心にある国際会議場で4月3日～6日迄開かれた。

翻って、2003年春、YADIM理事長（Dr.Nakhaie）に誘われ同理事長室と一緒に簡単な昼食を摂っていたとき、MIHAS立上げの陣頭指揮を執っていたMr.Shukri（MIHAS代表取締役）が突然現れ、理事長へ真剣な顔で何事か訴えていた時から、既に十年余の歳月を経ている。

今年も何時もの様にMIHAS開会式への出席案内は届いていたが、スケジュールの関係で今年のMIHAS出席を躊躇していた。しかし、期近になって例年と違う動きがあるとのことで、急遽クアラルンプールに飛び、MIHAS2013を覗いてみることにした。

例年MIHASと時期を相前後し、出展企業や海外ハラール認証団体のため、クアラルンプール国際会議場で、ハラール情報社（Halal Journal）がマレーシアだけでなく世界のハラール市場やハラール基準、非イスラーム国に於けるハラール事情を紹介する世界ハラールフォーラム（WHF：World Halal Forum）が開かれるのが常であった。MIHASに参加し、WHFで最新のハラール情報を得るため、シンガポール、インドネシア、台湾、南アフリカ、米国、欧州諸国のハラール認証団体がマレーシアに集結するようになっていた。拓殖大学イスラーム研究所も2008年のWHFで、日本のハラール認証について紹介する機会が与えられ、（宗）日本ムスリム協会との提携による当研究所のハラール査定、その後の認証発給方法について紹介説明している。

さて、今年のWHFは、例年のそれと全く違う様相であり且つ聴衆の多さに驚かされた。会議場正面舞台の背景には左側にマレーシア政府国際貿易産業省（MITI）のロゴ、右にハラール産業開発公社（HDC：Halal Industry Development Corporation）のロゴ、その間に「World Halal Week Kuala Lumpur Conference 2013, 3-4 April, 2013」と大書されている。正面にスクリーン三面、それらには「World Halal Research」のロゴと「World Halal Forum」のロゴが映し出されていた。会場は例年の倍ほどの大ホール、既に聴衆がぎっしり座っていた。

また会議場には、隣接した小さな展示室があり、そこは「第二回ハラール革新展示場（2nd Halal Innovation Exhibition）」とあった。

4月3日午前10時、会議場を覗いたところ、過去に例が無いほどの聴衆を集めた会場には600名程の席があり、それらはほぼ満席であった。聴衆は、殆どがマレーシア青年男女のようであり、海外からの聴衆も殆どが若者達であった。例年マレーシアのMIHAS視察と同時にWHFで東南アジア・イスラーム市場やハラール認証の最近の動向を得ることを目指して来ていたハラール認証団体関係者は数名しか見当たらなかった。

会議場で配られていたプログラムには、Hosted by MITI（マレーシア政府国際貿易産業省）、Organized by HDC（ハラール産業開発公社）、Strategic PartnersとしてMATRADE（マレーシア国際貿易開発公社）と国際ハラール標準同盟（IHI：International Halal Integrity Alliance）。IHIは、国家のハラール・オーソリティ間の協調促進を目的とする、マレーシア民間で組織され、マレーシアに本部を置く国際非営利組織）のロゴが記されていた。

会場で配布されたプログラムには、「ハラール産業開発公社（HDC）は、5年連続で世界ハラール研究サミット（WHRS）を開催しており、ハラール関連の知識を共有し、貢献することが関係者のための重要なプラットフォームを提供するほか、国際および地域レベルの両方でハラールの意識を高めることに貢献していると考えている。HDCは、従って、MITI管轄のもとMATRADEに組織されたマレーシア国際ハラール展示会・見本市（MIHAS）と世界ハラールフォーラム（WHF）と共にこれら全体を総括管理し、マレーシア・ハラール週間とし、WHRSもそれらの一部とすることが重要である」とあった。

MIHAS開催一ヶ月前突然MIHASはMATRADEからHDCに移管する旨、連邦政府首相から指示が出されたとのこと。従って、HDCがMIHAS、WHF、WHRS、展示、ハラール教育、広報、訓練、新規技術革新等の推進・実施母体となったのだ。

今年の「マレーシア・ハラール週間」は、「MIHAS」と「世界ハラール週間会議2013」を組み込んだ「世界ハラール週間」として運営された。WHWC2013のプログラムから、WHWC2013は、新興技術やハラール・ビジネスの機会の新たな創出につながる究極の目的とWHRS（World Halal Research Submit）やWHF（World Halal Forum）で構成される。これは全体のハラール価値連鎖内で、技術革新と研究は、持続可能なハラール産業を作成する際に重要であるとして、継続的にハラール産業の革新を刺激するためのマレーシア政府の取り組みに沿ったものであるとしている。

2日間の会議は、クアラルンプール・コンベンションセンターで、ハラール研究、技術革新とビジネスへの応用における課題や共有、新しい進歩に焦点を当てている。「ハラールエコノミー」をテーマとして、有識者発表、参加者協議・議論、展示会や研究成果の商業化を特色とする。参加者は相互交流し、地場および国際の両方の科学者、研究者、学者、ビジネスリーダーだけでなく、新たな研究成果、新技術、動向、課題やグローバルハラール産業における課題について意見交換と議論をすることができる旨HDC社長は述べている。



WHWCに併設の第二回ハラール革新展示場



MIHAS 2013 会場風景

国際貿易・工業省副大臣：

ダト・パドカ・ムクリス・マハティール

【Ⅰ】 WHW Conference 2013 (旧WHF)

第一日目 (2013年4月3日 (水))

07:00— 参加者登録、開場

09:00— 祈り：マウラーナ・シャイク・アフイーフディン (イラク)

第一部

09:25—10:20 技術革新を通して刺激するハラール・エコシステム

パネリスト：1) ペルヴァイズ・アハマド博士
(モナシュ大学 教授、マレーシア)2) カリム・ダグラス・クロウ博士
(IIAIS教授、マレーシア)

司会：セドミル・ネストロヴィク博士

(ESSEC ビジネススクール教授)

第二部

09:25—10:20：ハラールサイエンスに吹き込む技術革新

講演 1 「技術革新と共に上昇するハラール」

：ハーニー・マンズール博士 (クウェイト)

講演 2 「ハラール市場における酵素の技術革新」

：ハムザ・モハド・サレハ博士 (マレーシア)

10:20— マレーシア国歌「ネガラク」斉唱

10:25— 歓迎の挨拶：ダトスリ・ジャミル・ビディン

(HDC 代表取締役、マレーシア)

10:30—11:00 特別挨拶：トン・アブドラ・バダウィ (前首相)

HDC 戦略的パートナーシップ・プログラムの立上げ

11:00—14:00 休憩、昼食、礼拝

第三部

14:00—15:00：ハラール革新の成功事例

パネリスト：1) オスマン・ユースフ氏

(マネージャー・ハラール担当、Nestle Malaysia)

2) ヴイトン・パン氏

(GM、マミー・ダブルデッカー社、マレーシア)

3) ロバート・レナヴィレ博士

(プロゲナス代表取締役、ベルギー)

司会：マーク・ロザリオ氏 (代表取締役、マレーシア創案事業所)

15:00—16:00 世界ハラール週間2013の開催宣言

国際貿易・工業省大臣：ダトスリ・ムスタファ・

モハメド

16:00— 世界ハラール週間展示会の見学ツアー

第二日目 (2013年4月4日 (木))

第四部

09:00—10:30：ハラールへの橋掛けとなる投資

ハラールにおけるプライベート・エクイティ投資

講演 1 ルシュディ・シディキ氏

(イスラミック・ファイナンス担当、
トムソン・ルーター、USA)

講演 2 バドリシャ・アブドルガニ氏

(イスラミック・バンキング担当、CIMB イスラム銀行)

10:30—11:00 休憩

第五部

11:00—13:00：情報に基づいた選択を含む観光産業

講演 1 「ハラール観光における新しい開拓」

アズマン・アハマド氏

(CCO、ファイヤフライ航空、マレーシア)

講演 2 「ハラール食材、原材料」

ジュルゲン・ジョージ博士

(CEO、ヴァン・ヒース社、ドイツ)

13:00—14:00 昼食、礼拝 (ズフル)

第六部

14:00—15:00 グローバル市場に到達するためのオンラインメディアや技術の活用

講演 1 「ハラール医療と医薬品」

シュジャ・シャフィ博士 (英国ムスリム健康協議会長、UK)

講演 2 「ハラールのモーメントは輝く

ーソーシャルネットワークはビジネス」

リサ マベ女史 (デジタル通信・ストラテジスト、USA)

15:00—16:30 世界ハラール週間会議 2013 の閉幕辞

【Ⅱ】 WHRS “WHW 2013 展示室”

12のブースがあった。マレーシア化学㈱、マレーシア創案事業所、その他、ハラール事業を積極的に取組んでいると思われる会社のブース。それらは申し訳程度に会社パンフ等を並べてあるだけで説明人も居ない。

【Ⅲ】 MIHAS 2013

展示会場は例年通りクアラランブール市中心にある、国際会議場地上階を使って開催された。まず入って第一に感じたことは、中国企業ブースが昨年に比べて極端に減ったことである。昨年数社出展あった日本企業、今年は全く無い。

今回特徴的であったのは会場途中の側壁に初回 (2004年) から今回に至るまで出展ブース数、出展会社数、参加国数、入場者数、売上額がそれぞれの年別にそれらの年の特徴写真と共に掲示されていたことである。

それらを一覧表に纏めてみた。

年	ブース数	会社数	参加国	入場者数	売上額 (日本円換算)
2004	505	320	19	17,254	NA
2005	415	332	19	12,431	229.90 (6,897)
2006	505	392	18	27,523	168.30 (5,049)
2007	514	426	27	36,792	683.20 (20,496)
2008	621	537	26	41,862	2200.00 (66,000)
2009	628	529	31	34,051	2058.10 (61,743)
2010	661	527	32	35,386	1170.00 (35,100)
2011	514	401	32	16,096	514.84 (15,445)
2012	518	430	29	17,939	362.63 (10,879)
2013	404	335	23	NA	NA

* 売上額は million マレーシア Ringgit

(日本円換算：マレーシア通貨 Rm1. = ¥30)

今年の参加国数は上記一覧表の様に 23ヶ国である。それら国別出展会社数は、会場に準備された 200 ページにのぼる “MIHAS2013 ガイドブック” によれば、マレーシア 240 社、タイ 24 社、台湾 12 社、フランス 10 社、ベルギー 7 社、イラン 6 社、トルコ、アラブ首長国連邦、オーストラリアの三ヶ国各 4 社、中国、韓国、バングラディッシュの三ヶ国各 3 社、エジプト、インド、チュニジア、シンガポールの四ヶ国各 2 社、チリ、インドネシア、ニュージーランド、オランダ、サウディアラビア、オマーン、ポーランドの七ヶ国はそれぞれ 1 社である。だが出展していたインドネシア農業省ブースの説明によれば、インドネシアからの出展会社総数は 30 社とのことで、MIHAS 2013 ガイドブックの製作に間に合わなかったとのことである。



MIHAS 2013 に初めて車も出展

近代日本のイスラーム観

イスラーム研究所長 森 伸生

はじめに

イスラームが宗教として日本へ紹介されたのは、一八世紀であるが、日本人イスラーム教徒が出るのは、もっと時代が下って明治時代になってからである。その明治時代さえも、イスラームへの理解を持つ者は、特殊な好事家を別にしておんどいかなかった。そのような知的に厳しい環境の中でも、イスラーム地域との機縁を得て、イスラームの教えを受け継いだ者たちが出てきた。貧相なイスラーム認識の近代日本の中で、彼らは日本人なりにイスラームを理解して日本の中に新たな知性を築こうとした。

1 ムハンマド伝に表れたイスラーム観

(1) 日本語による最初のムハンマド伝

明治時代における日本でのイスラーム紹介を辿っていくと、まず明治9年(1876年)に林董ⁱ(ただす。1850~1913)が訳述した『馬哈默傳 并附録』が最初の日本語のムハンマド伝である。原本が英国ノリッジの大僧正であったハンフリー・ブリー(1648~1724)の『ムハンマド伝』であったために、イスラームへのキリスト教的反感が表れ、その訳書の中には、ムハンマドを好色漢、野心家、偽善者として描いている箇所が多数散見されるⁱⁱ。林もその偏見に気づいていたが、それを是正するだけの完全な資料が当時国内に存在しなかった。

(2) 英雄としてのムハンマド伝

その後は数冊のムハンマド伝が出版され、そこではムハンマドが英雄として扱われている。それらは、坂本健『魔詞末』(世界歴史譚第六編、明治32年/1899年)、池元半之助『マホメットの戦争主義』(明治36年/1903年)、忽滑谷(ぬかりや)快天『怪傑マホメット』(明治38年/1905年)、松本起『マホメット言行録』(偉人研究39編、明治41年/1908年)、口村信朗『創作・野聖マホメット』(大正12年/1923年)、坂本健一『ムハメッド傳』上下(世界文庫13・14、大正12年)などである。

この六冊はカーライルの『英雄崇拜論』の影響を受けて、従来の詐欺師的、官能的、偽善的なムハンマドから脱し、英雄的なムハンマドを表わしている。例えば「時代反抗の熱狂児」(池元)、「神性と動物性を兼有した怪傑」(忽滑谷)などと表現されているⁱⁱⁱ。

このようにヨーロッパのイスラーム批判やムハンマド像を、ときに修正しながら徐々に受容したように見受けられるが、やはり伝統的なヨーロッパのイスラーム観をそのまま受け入れたと思われるところもかなりあり、それは自前のイスラーム知識の無さゆえと言える。

よく言われる「右手に剣、左手にクルアーン」といったものがそのまま入ってきていることから、大部分の日本人にとって、宗教としてのイスラームや宗教人としてのムハンマドに対する関心はなかったといえる。これが明治初期の知識人の基本的なイスラーム観である。

2 政治家のイスラーム観

一方、明治の政治家のイスラーム認識はどうだったのか。ここに著名な三名の政治家をとりあげる。

(1) 井上毅の『マホメット論』

井上毅(こわし)(1844~1895)は『マホメット論』を発表している。井上は明治26年(1893)第二次伊藤内閣で文部大臣となった西欧文明に通じた政治家である。

だが、彼については『日本イスラーム史』の著者小村不二男(1912~1998)が非常に厳しい評価を下しているので、以下に引用する。

「井上毅が、『マホメット論』を発表して、イスラームの教祖マホメットがいかに猙獰(どうかん) 邪悪な人物であり、その宣布する宗教がこれまたいかに未開野蛮な低劣かつ淫靡な信仰であるかを極端なまでに誹謗し、こきおろしているのである。」^{iv}

(2) 『ジャポニヤ』イブラヒムによる啓蒙と大隈重信

次に大隈重信(1838~1922)について見てみる。大隈は第八代、

第一七代内閣総理大臣を務め、一方では東京専門学校(現早稲田大学)を創設し教育者としても知られている。

アブデュルレシト・イブラヒム(1857?~1944。タタール人)という人物が1909年2月に日本を訪れ、その後五ヶ月間滞在したときの記録『ジャポニヤ』が現在、和訳されている。彼は1933年に再来し、1944年に日本で亡くなっているが、非常に日本のイスラーム発展に貢献した。

イブラヒムが1909年2月17日に大隈重信と会見し、そのとき大隈重信がイスラームについて述べた記述がある。当時、大隈は政界から一時身を引いて、早稲田大学の総長に就任するほか、大日本文明協会会長としてヨーロッパ文献の日本語翻訳事業や、南極探検隊後援会長の就任など、幅広く文化事業に活躍していた。

(大隈)「私は、あなた以前にも三人のイスラーム教徒を知っています。ひとはイスタンブールからやってきて、私たちに一夫多妻をすすめました。私は彼に、それはわが国の憲法に反しており、何人にも勧めることはできない、もし、イスラーム教が一夫多妻であれば、日本人には無用である、と言ってやりました。口頭で伝えたのみならず、文書も手渡しました。」

さらにつけて、日本人の信心について次のように続けている。

(大隈)「さてそこで、私の考えですが、我々日本人は宗教の問題をそれほど重視いたしません。日本人の信仰はたいへん神聖で信心は固いものです。そのよりどころは、ただ一つ。それは大和魂です。一人の日本人がいかなる宗教を信仰していたとしても、彼本来の信仰は大和魂です。日本人は何よりも大和魂を神聖なものと考えます。日露戦争がそれを証明しました。ロシア正教徒である日本人も、みな率先して武器をとり従軍していきました。」

日本人は大和魂を誇りとし、宗教ではありません。いずれにせよ、日本では信仰の問題はさきわめて自由です。誰もが好きな宗教を宣言することができます。」

この大隈の言葉に対して、イブラヒムは日本人の利益についてはどうなのかと問い返した。

(大隈)「日本人の利益は民族精神を守ることにある、これを失うことは日本人であることを失うことです」^v

イブラヒムは大隈との会話の中から、日本の民族精神を護持する意識の強さを知らされたようだ。そこで、「キリスト教と日本の民族精神の護持とは共存できないであろうと確信した。」と記してある。この言葉は、350年前に日本へ入ってきたキリスト教でさえ広まらなかった理由を納得した言葉であろう。

ここで「日本人は何よりも大和魂を神聖なものと考えます」というのは、当時の日本の知識人の考えを表わしているように思う。

(3) イブラヒムと伊藤博文

次に取り上げた人物は初代、第五代、第七代、第十代の内閣総理大臣を務めた伊藤博文(1841~1909)である。大隈重信の政敵として知られている。伊藤博文は1909年3月12日にアブデュルレシト・イブラヒムと会見し、「日本ではキリスト教が早くから入ってきたけれども定着しなかった」と言い、その後でイスラームについて次のように述べている。

「イスラームは、とくに東洋の民族の間でよく広まっているようですので、日本人にも容易に受け入れられると思います。ただ、よくわかりませんが、一夫多妻と混同される可能性があります。おそらく、この問題はいくらか障害となるでしょう。日本人の間で一夫多妻はごく稀です。それでも、あるにはあります。ないとは申しません。」

それに対して、イブラヒムは「イスラームは一夫多妻ではありません。関係すらございません」と非常に明確に説明している。そして続けて「なぜなら、イスラームの信仰に必要なことではないからです。イスラームはたいそう簡潔な宗教です。端的に表現すれば、イスラームとは一神論と慈悲の徳から成るものです」と言っている。これはイスラームの本質から枝葉末節の行為を引き離し、イスラームの神髄をついた、すばらしい説明である。

伊藤博文はそれを聞いて、「私にイスラームの本質について少しご教授いただけないでしょうか。そもそもこれも私が考えていたこと

のひとつです」と言っている。

「イスラムとは今申し上げたとおりのものです。この宇宙には真の造物主がいるはずで、必ずいます。ただ単に自然の力だけではないはずで、私たちはその造物主の本質を正しく認識することにおいては無力であります。なぜなら、それは人間の理解を超越したものであるからです。このため、教師が必要となりますが、それこそが偉大なる預言者なのです。彼は、道徳の恩恵と全体の平和とを保証する神の摂理を教えたのです。これらを承認することこそイスラムなのです。この要点は、二つの言葉によって教えられております。それは、『ラーイラーハ・イッラーラー、ムハンマド・ラスールラー（アッラーの他に神はなく、ムハンマドは神の預言者なり）』です」

イブラヒムがそう言うと、伊藤博文が「何とおっしゃいました。もう一度ゆっくり言っていただけませんか」と言い、そこでイブラヒムはこの信仰告白の言葉をゆっくり三度繰り返し、伊藤はこのアラビア語の信仰告白の言葉を彼の後について繰り返したという。

「こうして、この言葉の意味を認められましたならば、閣下をムスリムと呼ぶことができます。閣下はこの時点からムスリムになられたこととなります。ムスリムになるということは、すべてこれだけのことなのです」

別にこれによって伊藤博文がムスリムになったということではないが、伊藤博文は「なんということ。承服できないことはひとつもない。これは大変気に入った」、「ハナハダヨロシイデス」、「私もたえずこうしたものを追求してきました」と言っている。非常な驚きである。

イブラヒムはその後伊藤からこの時の信仰告白に反する言葉を一度も聞かなかったという。

これが『ジャボンヤ』^{vi}に載っている伊藤博文とイブラヒムの対話の一部である。伊藤はイスラムを否定することなく、すんなりと理解している。それは神道のもとにおける仏教を受け入れてきた日本人の文化的理解と見るべきなのか、それとも明治の知識人の世界の文化に対する特殊な対応と見るべきなのか。いずれにせよ、当時非常に進歩的な考え方でイスラムを見ていた政治家も確かにいたと言える。

3 明治初期の日本人ムスリム

(1) トルコで入信した山田寅次郎

山田寅次郎（1866～1957）はトルコでスルターン・カリフのアブドルハミード二世に勧められてイスラムに入信した。その経緯は、明治23年（1890年）に和歌山県串本の先の大島沖でトルコ船のエルトゥールル号が遭難するという事故に由来する。この来航は先に日本が送った使節に対する答礼として明治天皇に謁見した使節団の船であったが、609人の中で540人が亡くなってしまった。翌年、助かった69人を送還する船に山田寅次郎も同乗し、犠牲者たちへの義捐金をトルコへ持って行き、アブドルハミード二世に謁見が許され、そこに滞在する中で入信した。明治25年（1892年）のことである。

(2) ボンベイにて有賀文八郎入信

山田寅次郎の入信と同年に有賀文八郎（1868～1946）が入信したと伝えられている。有賀は元タクリスチャンであったが、ボンベイ貿易の開拓者でもあった。彼はボンベイであるからヒンドゥー教の世界だろうと想像して行ったわけだが、予想に反してイスラムのモスクや、モスクの中で規則正しく礼拝する人に感銘を受けてインド人の勧めでボンベイで入信することになった。有賀文八郎という人は財力も非常にあり、信心深い人物であったことが伝えられている。大隈重信に会って、イスラムの将来的な重要性や、政治、経済、文化、外交といったものが大事だからイスラムに注目したほうが良いと提言したとも記録されている^{vii}。

(3) マッカ巡礼を果たした山岡光太郎と田中逸平

山岡光太郎は明治36年に東京外国語学校を卒業して、5年間を、支那、蒙古、シベリアの一带の現地踏査に従事し、対口及び対支の国際政局の研究に没頭していた。明治四二年春に、イブラヒムが宣伝するイスラム世界の实情に感化され、マッカ（メッカ）巡礼を志した。「世界巡礼なるものが、欧米列強の世界政策に及ぼす所の影響の、すこぶる甚大なるものがある」という事を知りましたので、私は同年の秋メッカ視察のため、わが同志を代表致しまして、この

神聖メッカ府に向かって、巡礼教徒として出発したのであります」ⁱとその意気込みを回想している^{viii}。山岡は明治42年（1909年）10月にボンベイでタタール人のアブデュルレシト・イブラヒムと落ち合い、その地でイスラムの基本的教義を教わり、イスラムに入信した。マッカの地を踏んだのは、その年の12月1日であった。

次いで巡礼を挙行した人物は大正13年（1924年）に中国でイスラムに入った田中逸平（拓殖大学一期生、1882～1934）である。田中逸平については次号に別項を設けることにする。

4 初期日本人ムスリムのイスラム観：有賀文八郎を例として

有賀文八郎は日本イスラム界の揺籃期において日本人新人ムスリム向けにわかりやすく説明した「日本イスラム教信仰簡条」、「日本イスラム教の道徳概要」及び「入信誓約書」を書いている^{ix}。

その入信誓約書には、次のような簡条がある。

「一、唯一真神を崇拜し、ムハammad師をこの世に於ける最後の予（預）言者なりと信ず」とあって、イスラムの六信の最後として「六、復活の日あることを信ず」と書いてある。

それから、「なお良心に誓いて左の條項実行致すべく候」とあり、ここは行についての説明である。最初は「一、唯一真神のほかには神なし、ムハammad師は其の予（預）言者なりと、明らかに唱ふべきこと」とあって、それから礼拝、ラマダーンの断食、喜捨、マッカ巡礼と五行が書かれている。

その次に、「なお左の道徳を実行致すべく候」とあって、一番目が「天皇陛下に忠誠を尽くすべきこと」、二番目が親孝行、三番目が信者と兄弟関係を結ぶこと、四番目が統べて公正にすること、五番目が人造物に礼拝せず、である。

こう見ていくと、六信五行がきっちりと網羅されている。その中で一つ興味深いのが道徳簡条にある「天皇陛下に忠誠を尽くすべきこと」である。明治の人間にとってはどうしてもはずせないところであろう。これは非イスラム世界における生活方法の一つと捉えることができる。つまり、形だけでも現地の統治権力に敬意を払う。イスラムには現地の規則に則するという考え方があるから、それに沿ったものと考えられる。このようにイスラムの規範との整合性で、有賀のイスラム理解を考えることが出来るが、明治の人間にとっては、天皇陛下への忠誠とアッラーへの信仰を矛盾なく受け容れることができたとも思える。

『日本イスラム史』の著者小村不二男は、明治ムスリムに対して次のように評価している。

「明治のムスリム先覚者たちは有賀（文八郎）、山田（寅次郎）、山岡（光太郎）、田中（逸平）ら、いづれも劣らず国士的熱血漢であった。これに続く第二期の松林亮、三田了一、須田正継らの日本ムスリム界の大先輩たちもまたその信仰心といい、旺盛なる実践的行動力といい、その例外ではなかった」^x。まさに明治の気骨ある人物らであったようにうかがえる。

さいごに

こうして見てくると、明治において、一般の日本人にとってイスラムは縁のなかったものであったことがわかる。知識人や政治家はイスラムに対して興味はあったが、イスラムとは何たるかを知らずには、機会がほとんどなかったと言える。

当時イスラムになった人たちの特徴として共通しているのは、トルコにしろ、ボンベイにしろ、中国にしろ、イスラム世界でムスリムになっていることである。つまり、信仰と生活が体現されている共同体を体験することによってイスラムの真髄に触れた人たちである。体験があつてはじめて、彼らはイスラムを自分の中に受け容れることができた。

i 幕臣、駐英大使、外務大臣経験者

ii 杉田英明『日本人の中東発見』東京大学出版会、146頁

iii 前掲書、144～152頁

iv 小村不二男『日本イスラム史』日本イスラム友好連盟、1998年、45頁

v 小松香織・小松久男訳『ジャボンヤ』第三書館、1992年、35頁

vi 前掲書、143～144頁

vii 『日本イスラム史』160頁

viii 前掲書360頁

ix 前掲書358～359頁

x 前掲書、54頁

お問い合わせ先：拓殖大学イスラーム研究所
〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14
TEL：03-3947-2419 FAX：03-3947-9416
ホームページURL: <http://www.sri.takushoku-u.ac.jp>

拓殖大学 イスラーム研究所 ニュースレター

平成25年 6月27日発行 第39号
発行人 拓殖大学イスラーム研究所
編集人 イスラーム研究所主任研究員
柏原 良英

正統四代カリフの時代－アブーバクル（16）

預言者とアブーバクルは、マディーナへ向かう途中、厳しい日差しを避けて岩陰に座って休憩を取っているところへ、クライシュ族の羊飼いの若者がやって来た。アブーバクルは、彼が危険な人物ではないのを確認してから尋ねた。

（前回からの続き）

「あなたの羊は乳が出ますか。」と尋ねると、彼は「はい」と答えた。「私達のために乳を絞ってくれますか。」と尋ねると、また彼は軽やかに「はい」と答えてくれた。

彼は羊を捕まえて乳を絞りだして、木で出来たお碗いっぱい乳を絞りだした。私は預言者の容器にそれを受けて預言者へ持って行った。しかし、預言者はまだ休まれているので、起こすのを躊躇い、彼が目覚めるまで待った。預言者が目を覚ますと、私はミルクの底まで冷たくなるようにミルクのお碗に水をふりかけた。そして、「お飲み下さい、アッラーの使徒様」と言って、彼に差し出した。彼はそれを飲み干し、それを見て私は満足した。

預言者は「旅はゆっくり出来ない。」と言われたので、「確かに」と言って、太陽が傾くのを待って、私達は出発した。

クライシュ族が我々を追っていたが、サラーク・ブン・マーリクだけが馬に乗って私達に追い付いた。

「追跡の手が私達に追い付きました！アッラーの使徒様！」と私は興奮して言った。

「悲しむんじゃない。確かにアッラーは私達と一緒にいます。」と、預言者はサウルの洞窟での一語を私に言った。

サラークがほんの一槍もしくは二槍程に我々に近付いた。

「アッラーの使徒様。追跡の手が我々に追い付きました。」と言って、私は泣いた。

「どうして、泣くのかね。」と預言者は言った。

「アッラーに誓って、私自身のために泣いているのではなく、あなたのために泣いているのです。」と私は言った。

預言者は祈って、「アッラーよ。あなたのお望みのままに、あの男から私達をお護り下さい。」と言った。

すると、サラークの馬は砂に足を取られて、前に進まなくなった。

このようにして、またしても無事にアッラーの助けによって難関を通過した。・・・

アッラーがアブーバクルを聖遷での預言者の同伴者に選んだのは、このような数々の緊迫した場面に遭遇させ、如何なる状態でも不安を抱くことのない預言者の姿を目のあたりにさせ、アッラーへの全幅の信頼を実感させるためであった。それにより、アブーバクルの信仰はより完全なものとなった。これ以後、アブーバクルはアッラーからの救いに不安を抱くことはなかった。

敬虔なる信者二人はマディーナへ向かって旅を続けた。アブーバクルは預言者を護りながら、時には彼の前を歩き、クライシュ族の見張りの者がいないかを確認、時には、彼の後を歩いて追跡者が

いないかを確認、先に進んだ。アブーバクルは一人の男に出会った。彼は「アブーバクルよ、あなたと一緒にいるのは誰ですか。」と尋ねた。「この人は私に道を示してくれる人です。」とアブーバクルは答えた。その男は普通の道案内の者だと考えて立ち去った。しかし、その意味するのは人を導く正道のことであった。アブーバクルがこのように言ったのも、クライシュ族への密告を恐れたからだ。ムハンマドを見付けて届けた者には百頭のラクダを与えることになっていた。

祝福される二人は辛くて厳しい試練の旅の後によりやく、先に移った教友達やマディーナのムスリム（アンサール・援助者）の待ちこがれるなかで、マディーナに到着した。二人に降り掛ったいかなる危険もアッラーの助けによってすべて避けることができた。アッラーの保護はすべての陰謀、策略に勝っていた。アブーバクルと彼の家族は、祝福されるべき聖遷成功のために信頼できる番人となり勇気ある助け人となった。この聖遷はイスラーム共同体を建設する基礎となり、輝かしいイスラームの歴史の幕開けであった。

（次号に続く）

研究会報告

【平成25年度第1回タフスィール公開研究会開催】

今年度第1回目のタフスィール（クルアーン解釈）公開研究会が、5月25日午後2時より文京キャンパスC館で開かれた。講師は森伸生イスラーム研究所長でクルアーン第10章ユヌス章1～27節を解説した。

محتويات العدد

1. مقالة عن الحياة الدراسية في السعودية
الطالب : نومورا أكيفومي
الطالبة : هوريغوتشي يو
2. تقرير عن المعرض العالمي للحلال بماليزيا
أستاذ زائر : موتو هيديئومي
3. مقال : الفهم الياباني المعاصر للإسلام
مدير معهد دراسات الشريعة : موري نوبوأو
4. مقال : الخلفاء الراشدين (16)
مدير معهد دراسات الشريعة : موري نوبوأو
5. أخبار المعهد: الدور الأول لدراسات التفسير (سورة يونس)